
紅薔薇

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅薔薇

【ZPDF】

N1057P

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

君が好き。

好きで、胸が痛い。

わたしが薔薇なら、君の血で紅く染まりたい、それほどに君を愛している。

ねえ、君も誰かを愛しく思つて泣く夜があるの？

ねえ、君も誰かが愛しすぎて胸が痛むことがあるの？
もつと、もつと泣けばいいのに。

もつと、もつとその目を潤ませて懇願するよつ
に、苦しくてたまらないと胸をかきむしりて涙を流せばばいのに。
ひよつと、ひよつと泣けばいいのに。

痛い顔を見せて。

そのままらかな頬に涙を流してみせて。

痛みだけが真実だとしか思えないわたしに、確かにそうだと確信
させて。

愛してるなんて言葉はどつせ時が経てば風化する、色褪せて握り
締めた手の中で音もなく壊れる。それならまだ、消えない傷を残す
ほどの痛みを「えて、そこから流れる血の色、その方がよっぽどの
本物。

わたしは薔薇になりたい。

鋭い棘を全身にまとつて、しならせで、君の肌に食い込んでやわ
らかな皮膚を引き千切るから、痛みに唇を噛んで血を流してみせて。
君の血を吸い込んで、取り込んで、わたしはなによりも輝く紅薔薇
になつてみせるから。

わたしの犬歯が獣のそれのように正しく鋭く伸びていたのなら、
君の喉元を食い破つて血を啜るのに。君の悲鳴にくちづけて、すべ
て飲み干してあげるのに。
わたしは獣になりたい。

肉食の獣。

血の匂いにただ本能から興奮するおろかな獣になりたい。

君の骨も肉も噛み碎いて血も飲み干して、自分の胃に収めたのな
らきっと安心できるのに。君から愛されていたと信じることができ
るかもしれないのに。

ねえ、君も愛しさに胸を詰まりさせて、声を押し殺して泣く夜があるの？

ねえ、君も愛しさを自分ばかりが募らせているかもしねないと震えたりするときがあるの？

「背中」

「背中？」

「綺麗」

「自分じゃ見えないから分からなことよ」

君の背は薄い。肩甲骨がくつきりと形を浮かび上がらせている。これが翼の名残だなんていうのはきっと嘘だ、これはこれから翼になる途中のもの。男の人にしては薄い肩や、細い二の腕や、平らなお腹だとか丸い指先だとか。君が天使だとうのならわたしはそれを信じる、ほんの少しの疑いも持たずに。いつかこの肩甲骨は翼に変わる、皮膚を破いて血を滴らせて、それでいて穢れない真珠色の美しい羽を広げる。

その時、わたしが傍にいられたらいこのこと。

君の肩甲骨を撫でながら、わたしは目を瞑る。想像する。君の翼。空を飛ぶための、自由。そのまま君の背中に頬を摺り寄せる。わたしの体温は低いはずなのに、君の背中はもつとひんやりしている。ずっと裸でベッドに腰掛けていたせいで。生まれたままの姿で、いたせいだ。

「また泣いてる？」

「……なんで？」

「あなたは、泣き虫だから」

泣いてなんかないよ、と答えようとしたのに、自分の頬が濡れていったのに気が付いてしまったからなにも言えなかつた。わたしが泣き虫なのは、君を好きなせ이다。君を思つと胸が詰まる。会えない夜には会いたくて、会つてはいる今は会えなくなる数時間後を想像して、どうしていつも溶け合つてしまえないのかと絶望する。

わたしは君に生まれてくればよかつたの。」

そうしたら、一勝鏡の中の自分にくちづけて幸せに生きていけたの。」。

「……噛んで、いい?」

「いいよ、どこ噛みたい?」

「……腕、「

本当は喉元に食らこついたいのに、我慢してそう言つ。君はわたしの名前を呼んで、こちらを向いてくれる。腕を差し出して。

「噛んでいいよ

「……嘘、わたしを噛んで」

「やだ、痛そだか?」

「痛いのがいいの」

「なんで」

「……痛くされたら、残るもの

記憶が。君が。わたしに。」

うんと痛くして欲しい、死んでしまつ寸前までぼろぼろに噛んだり傷つけたりして欲しい、消えない傷が欲しい、君がわたしと一緒にてくれた時間の分だけ、君がもしかしたらわたしを好きだったかもそれないと勘違いできるように。わたしが。

「痛い記憶なんて残すなよ」

胸の痛みは苦しいのに、身体の傷は欲しいなんてわたしはおかしいのかかもしれない。君が好き。いつかわたしがいなくなつても、想いは残つて君の幸せを願い続ければいい。

「痛いのは、分かりやすいから」

愛されていると思い込むことができるから。

「あなたが痛いのは嫌です」

「わたし、頭の中では君にうそとひどいとしてるよ

「……なにしてるの?」

「わたしは白い薔薇でね、君の皮膚を切り裂いて血を啜つて、紅く染まるの」

「あなたが、紅い薔薇になるの?」

「うん、君の血に染まって」

ふうん、と君はつぶやく。伸ばされていた腕はわたしの頭の後ろに入り込んで、胸元に引き寄せたから驚いて体勢を崩す。言わなきやよかつたかな、と思つたのは、くだらない妄想だから。

「泣き虫」

「え、なに、」

「泣きそうな顔してゐる」

君の胸にわたしの頬は押し付けられてくる、心臓の音はやわらかい。

「わたしの顔なんか、見えてないのに」

「見えなくたつて分かる」

俺のこと好きすぎるくせに。

言われて息が止まる。

どうしてそれを、知つているの。

「あなたは俺のこと好きすぎて、いつも泣きそうな顔してゐるもん」

うぬぼれないで、と言えない、本当のことだから。

「それでいて、俺が好きって言つてもうひとつも信じてくれなくて泣くんだよね」

「だつて、」

「あなたは自信がなれ過ぎ」

「……愛されてる自信がある人なんているの?」

「俺」

即答されて言葉に詰まる。俺、つて。

「あなたにおぼれるほど愛されてる。自信あるよ?」

「ごめんね、の言葉が続けて君の唇からこぼれて、なんだか触れてる肌の温度が上がった気がした。

「愛されてばつかで、俺の愛情上手く伝えられなくて」「めん、俺の血であなたが紅く染まつてそれが愛の証になるんなら、どこのでも切つたりしていいよ」

結構好きなんだけどあなたのこと、と言わされて、わたしは赤面しながらうるたえる、そんな、言葉なんていつか嘘になるもので、こんなに幸せになってしまってるのは、愚かなではないかと。思つて。あなたの血を吸つて紅い薔薇になりたいのに、あなたの腕の中でわたしはすべての棘を失くす。好きすぎて苦しいなんて、ばかげている、母親を求める子供でもないのに。

「……君は、好きつて気持ちに胸が押しつぶされて、泣きたくなる夜とかは、ないの？」

「好きつて気持ちは、俺を幸せにしかしないから、そんな夜はない」
君は、と言いかけたときに身体を引き離された。一の腕をつかまれて、引き剥がすように。え、と思つてもう哀しくなる、おろおろとする、わたしは君の機嫌を損ねることを口にしてしまったのかど。だけど慌てて仰いだ君の唇はやわらかく持ち上げられていて笑つている。

ねえ。

わたし、君が好きだよ。

唇が静かに重ねられる。わたしは目を閉じて、君の体温を感じる。匂いを覚えておこうと必死になる。

君が好き。

それだけでもう。

胸が痛い。

こんなに好きでじうじょうと、泣くしかできないわたしを笑つて。いつかの翼を肩甲骨に隠し持つ、わたしの恋人。甘い声の持ち主。「ごめん、あなたが泣くたびに俺は愛されてる実感でぞくぞくする君の血でなくて、君の体温ですら紅く染まるわたしを。

どうか、どうかいつまでも。傍に置いて、飽きて捨てるときはどうか。

一瞬で、枯らせて。わたしを。その手で粉々に碎いて。壊して。だつてもう、わたしは棘のすべてを抜かれた自分の身も守れない、薔薇なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1057p/>

紅薔薇

2010年11月23日23時25分発行